

長崎支店は 開設七〇周年を迎えました

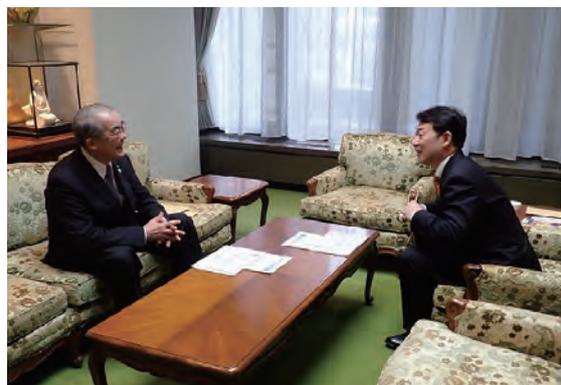
▼長崎支店は、三月一日に開設七〇周年を迎えました。昭和二十年（一九四五）四月に事務所として設立されたのち、昭和二十四年（一九四九）三月一日に九州地区で最後となる六番目の支店として開設されました。

▼支店が開設された頃の長崎市内は、原爆の痛手がいたるところに残っている状況でした。そ



「魅力の宝庫」である長崎の観光資源を、ちやんぼんの具材に見立てた銀行券裁断片オブジェ

中村長崎県知事（写真左）と平家支店長の対談の様様



のような中で旧長崎市立博物館を増改築した木造の営業所は、「白亜の殿堂」と呼ばれていたそうです。

▼七〇周年を迎えるに当たり、支店広報のシンボルとすべく、県内の観光資源を模した銀行券裁断片のオブジェや、見学記念スタンプ等を新たに製作しました。さらに、周年行事の一環として中村法道長崎県知事に「ご来店いただき、平家達史長崎支

店長との対談を行ったほか、産業・金融界の関係者を招いて店内見学会を開催しました。

▼また、長崎支店のホームページに開設七〇周年を記念した特設ページを設けました。その中にはバーチャル店内見学コーナーを新設したほか、前述の各種行事の模様や周年記念特別レポート等を掲載しています。



▼長崎支店は、これからも地域とともに歩み、長崎県の一層の発展に貢献してまいります。

第七回FinTech フォーラムを開催

▼近年、キャッシュレス決済への注目が高まっています。ICチップを埋め込んだプラスチックカードやスマートフォンアプリなどを使った決済サービスが数多く提供されています。こう

したなか、決済機構局FinTechセンターでは、二〇一八年十一月三十日、第七回FinTechフォーラム「どうなるキャッシュレス決済手段…対面決済の未来」を開催しました。

▼開会挨拶において池田唯一理事は、便利で安全な決済サービスの普及や新しい金融サービスの登場は、日本経済の成長に



会場の様子

（撮影：野瀬勝一）



パネルディスカッションの様子

(撮影：野瀬勝一)

貢献することを指摘しました。これらは、決済の利便性向上やコスト削減にとどまらず、データマーケティングに活用したり、決済以外のサービスと連動させることで、新たなサービスや付加価値を生み出していくことができます。一方で、国民生活の重要なインフラであるリテール決済は、いつでも安心して使えるサービスであること、セキュリティ面で適切な対応

が取られることが重要であることにも触れました。また、新たな金融・決済サービスの普及に向けて、イノベーションを促すための競争的な環境を維持しながら、適切に協調して市場拡大を促進するような取り組みも論点となることを指摘しました。

▼フォーラムでは、キャッシュレス決済事業者から、ユーザーの利便性向上と加盟店に対する付加価値提供を両立することの重要性や、決済以外の事業との相乗効果への期待が指摘されました。たとえば、顧客への対応については、使い勝手の良いアプリケーションの提供や、加盟店の拡大を通じた利便性の確保などを通じて、キャッシュレス決済のメリット向上を図る工夫が紹介されました。加盟店に対しては、新たな決済ツールの導入を支援することで、キャッシュレス決済ニーズを持つ消費者やインバウンド客の取り込みを促す戦略や、決済データを活

用したマーケティングサービスを加盟店に還元する取り組みなどが有効との指摘が聞かれました。パネルディスカッションでは、ユーザーや加盟店を開拓する上での課題・工夫や、インターフェースや資金決済手段の選択、コスト構造と決済手数料に対する考え方、競争が決済手数料に及ぼす影響、決済データ活用の難しさや留意点など、幅広い議論が行われました。

▼FinTechフォーラムの議事概要およびプレゼンテーション資料は、日銀ホームページの「決済・市場」↓「FinTechセンター」↓「FinTechフォーラム」のコーナーをご覧ください。プレゼンテーションやパネルディスカッションの様様をYouTubeで視聴することもできます。



「第一四回日銀グランプリ」キャンペーンからの提言」の決勝大会を開催

二〇一八年十一月二十三日(祝)

▼大学生を主な対象とする金融・経済分野の小論文・プレゼンテーションのコンテスト「第一四回日銀グランプリ」キャンペーンからの提言」が今年も開催されました。今回は全国各地の五二大学から一四七編の論文が寄せられ、一次審査を通過した五チームによる決勝大会が日本銀行本店で行われました。

▼決勝大会では、佐藤義雄氏(経済同友会副代表幹事、住友生命保険相互会社取締役会長 代表執行役)、橘・フクシマ・咲江氏 (G&S Global Advisors Inc. 代表取締役社長) の他、若田部昌澄(日銀副総裁(審査員長)、鈴木人司・片岡剛士(両政策委員会審議委員の五名の審査員を前に、各チームとも堂々とプレゼンテーションと質疑応答を行い

編集後記

■今年も桜の季節がやってきました。皆さまは、桜の花にどのようなイメージをお持ちでしょうか。季節柄、卒業や入学・入社、出会いや別れといった場面を想像する方も多いのではないかと思います。私の場合、少々違うのかもしれませんが、満開の桜の花や桜並木を見るたびに、何十年、何百年と同じように繰り返される不変の美にしばし酔いしれます。時代とともに人類は進歩し、社会は発展してきました。桜などの植物も、環境に適応するために少しずつ進化してきているはずですが、でも、思いやりや美しさなど、ずっと変わらない方がよいこともあります。今回本誌でご紹介したインタビューや対談、奈良県桜井市の取材でも、時代に応じた変化や発展を追求しつつ、根底には変わらない素晴らしさも訴えている気がします。デジタル化の進展など、私たちを取り巻く環境は急速に変化しています。多忙な暮らしの中で、ちょっと立ち止まろう、振り返ろう、この季節の桜がレトロなメッセージを私に伝えてくれます。(中川)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。

(http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ (<http://www.boj.or.jp/>) をご覧ください。

にちぎん 2019年春号
編集・発行人 中川 忍
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
☎ 03-3277-2405



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社アイネット
©日本銀行情報サービス局 禁無断転載



決勝進出5チームと審査員の皆さん

(撮影：野瀬勝一)

ました。
▼最優秀賞には、東京経済大学経済学部・経営学部チームの「所得控除連動型消費税免税マイナス金利デビットカード(免税カード)のすすめ」が選ばれました。この他、優秀賞に函館大学商学部チーム・麗澤大学経

済学部チーム、敢闘賞に東京大学経済学部チーム・日本大学経済学部チームが選出されました。
▼審査員からは、「統計データに加え、実務家への聞き取り調査やアンケート等を通じて、自身の抱いた問題を解決しており、具体的に実現可能性を感じさせるものだった」との総評がありました。

日銀ホームページに専用コーナーを設け、決勝参加チームの作品全文と審査員講評および奨励論文の要旨を紹介しています。また、同コーナーやYouTubeでは決勝大会の様相を収録した動画も配信しています。

